

琉球大学学術リポジトリ

仕掛けられた宗教批判 — 『ドン・キホーテ正編』 第14章「絶望の歌」についての新たな解釈の試み—

メタデータ	言語: 出版者: 琉球大学法文学部 公開日: 2012-07-19 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 鈴木, 正士, Suzuki, Masashi メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.24564/0002007202

仕掛けられた宗教批判

—『ドン・キホーテ正編』第14章「絶望の歌」についての新たな解釈の試み—

鈴木 正士

0. 三人の登場人物の意図を操る作者の意図——筆者の仮説

『ドン・キホーテ正編』(*El ingenioso hidalgo don Quijote de la Mancha I*, 1605) の11章から14章までに描かれるエピソード(筆者は「グリソストモの葬式のエピソード」と名づけたい)における、14章のグリソストモ(Grisóstomo)の遺稿の詩「絶望の歌¹」(*Canción desesperada*²)は、11章での〈希望の歌³〉(*canción de esperanza*)がアントニオ(Antonio)が希望を抱き生きていくために創作した《物語》であるのに対し⁴、グリソストモが、マルセラ(Marcela)から《結婚》を拒絶されたため、希望を放棄し絶望へと至るために書いた《物語》ではないか、と筆者は考えてきた⁵。(筆者は、《物語》を、《物語》を創作することで、その作者が〈受け入れがたい現実〉を受け入れることができるという、特殊な機能を持つ虚構と定義してきたが⁶、本稿においては、主に、「絶望の歌」を、事実に対する虚構、と捉え、論を進めようと思う)。

しかし、「絶望の歌」における問題はこればかりではない、と思われる。「絶望の歌」が語り終えられたあとに登場するマルセラが、彼女のことを〈残酷な女〉だと言う村人たちの噂に対して弁明を始めると、「絶望の歌」の問題は、《物語》の働きから、《神》の信仰の問題へと新たな展開を見せるからである。

マルセラは、「絶望の歌」を聞いてもいないのに、弁明の中で、「絶望の歌」の中の〈きみ〉を非難する言葉と対応するかのようになり、「軽蔑」「嫉妬」「希望」「絶望」「分別」「残酷」などの言葉を用いているが、これは、作者であるセルバンテス(Miguel de Cervantes Saavedra, 1547-1616)が、読者に、マルセラの弁明と「絶望の歌」の中の残酷な〈きみ〉への非難の言葉を対照させようとしているからではないのだろうか。そして、比較の結果、実は、マルセラの方が

〈きみ〉よりも冷酷であり、それは、マルセラが《神》を希求していることに因ると、読者に気づかせることによって、作者は、意図的に、カトリック信仰を強要する同時代の思潮⁷を批判しようとしている、と考えられるのである。

前稿で考察したが、セルバンテスが、《神》中心思想を批判しようとした背景には、彼が共鳴していたエラスムス(Desiderio Erasmo, 1467?-1536)の思想が存在する⁸。エラスムスは、《神》との合一を望むあまり極端な信仰にはしり孤独のうちに死んでいく修道の生き方を批判し、愛と性によって命をつないでいくという点から《結婚》を重視する、《人間》中心思想を抱いていた⁹。

その一方で、正統思想を奉じる〈司祭である叔父〉に養育されたマルセラは、その叔父から聖書世界を教えられたため、エラスムスの思想とは対極的に、《神》だけを望み、一途に《神》と結ばれたいと願い、グリソストモとの《結婚》を拒絶した¹⁰。《結婚》を受け入れてもらえなかったグリソストモは、それが原因で自殺したのである¹¹。マルセラとは《神》中心主義者だったのである。

マルセラの信仰態度に表れるような、当時の宗教のあり方を批判するために、作者は、グリソストモ、彼の親友であるアンブロシオ(Ambrosio)、そしてマルセラの、これら三人の登場人物のそれぞれの意図を巧みに操っている、と考えられるのである。

まず、グリソストモは、マルセラとの愛の成就への希望を断とうと意図して、実際のマルセラとは異なる、残酷な〈きみ〉と〈きみ〉への《愛》に苦しんだ〈ぼく〉の〈愛と死の物語〉である「絶望の歌」という虚構を書く。

たしかに、「絶望の歌」は、一見、グリソストモとマルセラの〈愛と死の記録〉という事実のように見えるが、しかし、実は、当人たちとは異なる〈ぼく〉と〈きみ〉の〈愛と死の物語〉という虚構なのだ。なぜなら、「絶望の歌」を詳しく検討すると、〈きみ〉とマルセラが同一人物とは言えないからである。

グリソストモが絶望へ向かおうとしたのは、マルセラが誰からの《結婚》も認めなかったからである。マルセラは、修道女のような生き方を選んだ女性として描かれているが、ここには、エラスムスの《人間》中心思想の影響を強く受け、《神》中心思想を批判するセルバンテスの思想が看取されるのである¹²。

一方、アンブロシオは、グリソストモが書いた虚構である、〈ぼく〉と〈きみ〉の「絶望の歌」を、グリソストモの意図に反して読み違い、「絶望の歌」をグリソストモとマルセラの〈愛と死の記録〉という事実と思ひ込み、村人たちに吹聴するのだ。アンブロシオの意図とは、「絶望の歌」を〈愛と死の記録〉として伝えることなのである。アンブロシオにこのようにさせることで、セルバンテスは、《神》の問題を、グリソストモとマルセラの《愛》の問題の背景に置こうと意図しているのである。というのは、異端審問が機能していた17世紀当時、宗教批判をあからさまにすることは危険を伴ったからである¹³。

さらに、そのあと登場するマルセラがおこなう弁明の意図とは、アンブロシオや村人たちが噂する残酷なマルセラ像に対して反論する、ということである。

そして、セルバンテスは、マルセラに弁明させることによって、読者に、マルセラの弁明の内容と〈きみ〉への非難の言葉を比較させようとしているのだ。マルセラと〈きみ〉を対照することで、最終的に、マルセラは《神》への思いが純粹すぎるために、彼女こそ、〈ぼく〉から希望を奪い絶望へと至らせる〈残酷な女〉である〈きみ〉よりも、本質的に冷酷であると、読者に納得させようと、作者は意図しているのである。

結局のところ、セルバンテスは、《神》と結ばれることだけを切望する、《神》中心主義者マルセラを〈冷酷な女〉として描写することで、正統思想以外を認めない同時代の思想状況を糾弾しているのではないのだろうか。

そこで、本稿では、Iにおいて、まず、「絶望の歌」は虚構である、という点を確認したあと、アンブロシオは、その虚構を、グリソストモとマルセラの〈愛と死の記録〉という事実だと周りに喧伝している、という点を明らかにしたい。さらに、自己弁護するマルセラの意図に反して、作者はマルセラを〈冷酷な女〉だと見なし、それによって同時代の信仰のあり方を批判しているのではないか、という点を提起しようと思う。そして、IIにおいては、「絶望の歌」を検証しながら、マルセラの弁明と「絶望の歌」の〈きみ〉の描写に共通して見られる言葉や表現を実際に比較することで、セルバンテスは、テキスト上には直接は記述されていないマルセラの冷酷さを浮き彫りにしようとい意図している、と指摘したい。そのうえで、結論の代わりのⅢにおいて、作者は、三人の

意図を利用し、最後に、《神》中心主義者マルセラに弁明させることによって、宗教批判という爆弾を仕掛けている、という点を筆者は提出しようと思う。

I. 誤読される虚構：「絶望の歌」

1. 本エピソードの梗概

最初に、本エピソードを章ごとに紹介したい。

11章では、山羊飼いアントニオが、〈司祭である叔父〉と共作した歌¹⁴を、キホーテ達に聞かせる。その歌は、アントニオが、愛する娘オラージャ(Olalla)への届かぬ思いを〈成就する恋〉に変換した内容の歌だった(*I*, 153-161¹⁵)。12章で、山羊飼いペドロ(Pedro)がやって来ると、その朝、村でグリソストモが愛のために死んだ、と話す。グリソストモとは羊飼いになった学生だった。友人のアンプロシオも同様の格好となった。ふたりが羊飼いに身をやつしたのは、それ以前に羊飼いになった美しい村娘マルセラを愛したからだった。彼女は、幼い頃両親をなくしたため、〈司祭である叔父〉に養育されたが、突然羊飼いになったのだ。マルセラは男たちと親しくつきあうが、求婚されると激しく拒絶する。拒まれたひとりであるグリソストモは死んでしまった。そのため、翌日、葬式が営まれることになったのである(*I*, 161-67)。13章での葬式では、グリソストモがどれほどマルセラから激しく拒絶されたか、その点に関しては、彼が死後焼却することを望んでいた、棺のなかにある遺稿に詳しい、とアンプロシオは訴える。それが「絶望の歌」だった (*I*, 177-80)。そして、14章では、キホーテが13章で知り合った紳士ビバルド(Vivaldo)によって、「絶望の歌」が朗読される(ビバルドは、13章でのキホーテとの対話において、本研究¹⁶の第二の問題である《愛か神か》の提起と、アンプロシオが〈愛と死の記録〉を創造することに協力しているという点で、重要な働きをしているが、これら二点については別稿で詳述したい)。「絶望の歌」の読後に現れたマルセラは、グリソストモの死は自分のせいではない、と弁明だけすると立ち去る。このあと、「絶望の歌」は焼かれ、棺は埋められ、アンプロシオが墓碑銘を刻ませるつもりであることが知らされる(*I*, 180-89)。

以上が、「グリソストモの葬式のエピソード」の梗概である。

2. グリソストモの意図：〈愛と死の物語〉

「絶望の歌」は、一読すると、グリソストモとマルセラの〈愛と死の記録〉とみなされるが、実は、〈ぼく〉と〈きみ〉との〈愛と死の物語〉という虚構だと考えられる。グリソストモは、残酷な〈きみ〉に苦しめられ死を選ぶ〈ぼく〉が主人公の「絶望の歌」という虚構を書き、自らを〈ぼく〉に擬して希望を放棄しようとしたのではないのだろうか¹⁷。

そこで最初に、マルセラとの《結婚》が果たせなかったグリソストモは、「絶望の歌」という虚構を書き、希望を絶とうと意図した、という点を確認したい。

グリソストモは、愛するマルセラからではなく、残酷な〈きみ〉に苦しめられ自殺する〈ぼく〉が主人公の「絶望の歌」を書いて〈受け入れがたい現実〉を受け入れた、と考えられる。というのは、マルセラへの思いを断ち切るためには、未練を催させる優しい面影よりも、できるだけ残酷な〈きみ〉から残忍な手口で《愛》を拒絶されたと考える方が、容易に絶望へと傾斜できるからである。

では、どうして、グリソストモには、希望を放棄し結果的に死を選ぶ、という以外の〈受け入れがたい現実〉を受け入れる方法は残されていなかったのだろうか。それは、マルセラから《結婚》を拒絶されたグリソストモにとっては、死ぬことだけが唯一の避難所だったからだ¹⁸。

この背景には、エラスムスの《人間》中心思想に共鳴し、《神》中心思想を批判する、セルバンテスの思想が存在する。エラスムスの《人間》中心思想においては、《結婚》は《人間》の命をつないでいく重要な営みとみなされていた¹⁹。そのため、セルバンテスは、《神》との合一を第一と考えるマルセラ²⁰と《結婚》できなかつたグリソストモを絶望に至らせるのである。こうして、グリソストモは、カストロ(Américo Cástro)が唱えるように²¹、自殺したのだ。

結局のところ、「絶望の歌」とは、「永遠にマルセラのことを人々の記憶にとどめる」(I, 179)ためにグリソストモが綴った、とアンプロシオが断言したよ

うな、グリソストモとマルセラの〈愛と死の記録〉ではなく、グリソストモが希望を絶つために創作した、〈愛と死の物語〉だったのである。だから、グリソストモは、「自分の亡骸を埋葬したら、直ちに原稿も焼却するよう」(I, 179)、アンブロシオに命じたのだ。

「絶望の歌」とは、死後には忘れ去られるべき虚構だったので。

グリソストモは、「絶望の歌」という虚構を書いて、マルセラとの《結婚》という希望を放棄しようと意図したのである。

3. 〈残酷な女〉がマルセラと同定できない三点の具体的な理由

「絶望の歌」の中には「マルセラ」という名前は一度も登場しないなど、この詩を詳細に考察すると、〈きみ〉とマルセラを同一人物と考えるには、いくつかの疑問が生じる。そこで、「絶望の歌」が虚構であることを明白にするために、〈きみ〉はマルセラではない、と考えられる三点の具体的な理由をあげたい。

第一番目は、「絶望の歌」を朗読し終えたピバルドが、詩の中のきみの行状が「今まで聞いていたマルセラの分別や優しさにはそぐわない」(I, 184)と言う台詞である。

この言葉は、マルセラと〈きみ〉とは別人である、というセルバンテスのメッセージではないのだろうか。セルバンテスは、暗に、〈残酷な女〉である〈きみ〉とマルセラは別人である、と示しているのである。

ふたつ目の理由は、グリソストモは、死後、自分の亡骸をマルセラとの思い出の地に葬って欲しいと望んでいたという点から、マルセラを強く愛していたはずなのに、「絶望の歌」の中では、〈きみ〉という女性は〈残酷な女〉として激しく非難されている、という点である。もし〈きみ〉がマルセラなら、グリソストモが〈きみ〉のことを悪く書くはずがないと思われるのだ。

12章で、山羊飼いペドロが、グリソストモが生前希望していた埋葬場所について、次のように伝える。

グリソストモは、コルク樫の泉にある大岩の下に埋めてもらいたいと言い残して死にました。あそこは、あの男がマルセラを初めて見た場所なのです(I,

161-62)。

また、13章では、グリソストモの埋葬場所で、アンプロシオが「こここそ、グリソストモがマルセラを初めて見、思いを告白し、最後にマルセラから拒絶された場所です」(I, 178)と言っている。

たしかに、人は亡くなるときに、思い出の場所を永遠の地にしたいと思うかもしれない。しかし、特定の女性に対して強い怨みを残して死んだ場合、わざわざ彼女との思い出の土地に葬って欲しいと願うだろうか。そこは一刻も早く忘れ去りたい場所のはずだ。グリソストモがマルセラとの思い出の地に葬って欲しいと言いつ残したのは、最後まで彼女への強い愛情があったからではないのだろうか²²。このように考えると、〈残酷な女〉として怨みをぶつける〈きみ〉とマルセラが同一人物だとは考えられないのである。

三番目の理由は、アントニオの愛する女性「オラージャ」の名前が冒頭から登場する11章の〈希望の歌〉とは対照的に、「絶望の歌」の中に「マルセラ」という名前が見られない、という点だ。

たしかに、ロドリゲス・マリン(Francisco Rodríguez Marín)が唱えるように、「絶望の歌」は、『ドン・キホーテ』以前に書かれた独立した詩なのだから²³、マルセラの名前が見当たらないのも当然かもしれない。しかし、アバジェ・アルセ(Juan Bautisuta A Valle-Arce)が指摘するように、オリジナルの詩との異同もあるのだから²⁴、セルバンテスは、この詩を「絶望の歌」として『ドン・キホーテ』に挿入する際に、「マルセラ」という名前を書き入れることもできたはずだ。それなのに、「絶望の歌」の中に、「マルセラ」と書き入れなかった。ここに、セルバンテスの確固とした意志が感じられるのである。セルバンテスは、意図的に、詩の中の〈きみ〉とマルセラを同一人物にしなかったのではないのだろうか。

結局のところ、〈きみ〉はマルセラではないのだ。

このことから、「絶望の歌」は、グリソストモが創造する〈愛と死の物語〉という虚構だと断定できるのである。

4. アンブロシオの意図：〈愛と死の記録〉

それなのに、「マルセラ」とは明記されていない詩の中の〈きみ〉を、読者はマルセラと見なしてしまう。どうしてだろうか。それは、グリソストモの友人であるアンブロシオが、「絶望の歌」をグリソストモとマルセラの〈愛と死の記録〉という事実と誤読し意図して村人たちに吹聴するためだ、と考えられる。

たしかに、アンブロシオが、「絶望の歌」を事実の記録と思い込むのは、詩の内容と状況が重なるため、ある程度やむを得ないことかもしれないが、しかし、実際のところ、「絶望の歌」は、すでに考察したとおり、虚構なのである。

ところが、グリソストモがマルセラから拒絶されたあとと死んだということを知っているアンブロシオは、グリソストモの死をマルセラの責任に帰し、すでに読んでいた「絶望の歌」を「グリソストモとマルセラの愛と死の記録」(I, 180)だと思込み、その誤解を「絶望の歌」の予告編のように披露したあとで、グリソストモの遺志に逆らって、この詩を村人たちに向かって読み聞かせるよう、埋葬場所に居合わせた旅人ピバルドを誘導するのである(I, 178-80)。

アンブロシオは、グリソストモが生前指定していた埋葬場所に、仲間とともに棺を運んでくると、「絶望の歌」の朗読前に、まず、「マルセラが彼を最終的に拒絶して無視するようになった」(I, 178)ために、「彼の惨めな生涯に悲劇の幕が下ろされた」(I, 178)と嘆く。そして、キホーテとピバルドに向かって、グリソストモは「天から限りない美德を授けられた魂」(I, 178)の持ち主であったのに「マルセラを熱烈に愛しながらも拒絶されました、崇拜しながらも蔑まれました」(I, 179)と言い、「獣」(I, 179)のように厳しく「大理石」(I, 179)のように冷たいマルセラから拒絶されたために「人生半ばにおいて死の餌食」(I, 179)となった、つまり、「グリソストモの命は羊飼いの娘によって終止符を打たれたのです」(I, 179)と訴える。

アンブロシオは、グリソストモの死は、マルセラからの愛を得られなかったことに因る、と考え、マルセラを強く非難するのである。

つづけて、アンブロシオは、「グリソストモは、永遠に、その娘のことを人々の記憶にとどめようと願っていました」(I, 179)と言う。

アンブロシオがこのように憶測しているのは、彼が前もってグリソストモが書いた原稿を読んでいたからだ、と考えられる。グリソストモとマルセラの愛と死の経緯は、「今、みなさん方が見ている、棺の中にある原稿が如実に示すでしょう」(I, 179)と、断言するからである。

そのため、興味を抱いたピバルドが、何枚かの原稿を取り上げる(I,179-80)。それが「絶望の歌」だった。

その原稿を見たアンブロシオは、「それはあの不幸な男の絶筆です」(I, 180)と言う。さらに、間髪入れず、「数々の不運のために、あの男がどのような境涯に陥っていたか、その点を知ってもらうため、みなさんに聞こえるように音読して下さい」(I, 180)とピバルドに頼むのである。

アンブロシオがこう言い切れるのは、グリソストモの原稿、とりわけ「絶望の歌」を精読していたからなのだ。グリソストモが死んだのはマルセラから《愛》を受け入れてもらえなかったためだ、とアンブロシオは考えていた。そのため、アンブロシオは、彼が埋葬以前に読んでいた「絶望の歌」を、グリソストモが書き遺したマルセラとの〈愛と死の記録〉だと見なし、すべて事実だと思い込んでいるのだ。そして、その思い込みを周りの者たちに押しつけるのである。

アンブロシオは、「グリソストモの遺言を寸分違わず実行しようと望んでいた」(I, 178)はずだった。それなのに、彼は、グリソストモが「自分の亡骸を埋葬したら直ちに焼却するようにと遺言した」(I, 179)「絶望の歌」を、結局はピバルドに読ませるのである。

このような展開を見せるため、詩を聴いた周りの登場人物たちだけでなく、読者までもが、「絶望の歌」の中の〈ぼく〉と〈きみ〉とはグリソストモとマルセラだという、アンブロシオの読み違いを知らないうちに共有するのである。

グリソストモが創造した、〈ぼく〉と〈きみ〉との〈愛と死の物語〉を、グリソストモとマルセラの〈愛と死の記録〉だと誤読したアンブロシオの意図とは、「絶望の歌」を〈愛と死の記録〉として喧伝することなのである。

5. マルセラの意図：自己弁護

マルセラは、このような噂を村中にたてられていたため、14章で、「絶望の歌」の朗読後登場すると、「グリソストモが苦悩の果てに亡くなったことを自分のせいにするのは理不尽だ」(I, 185)と言って、次のように弁明する。

わたしの望むものは、《神》がおられる聖なる世界であり、そのため、グリソストモだけでなく、誰からの《愛》も受け入れませんでした。グリソストモは、自らの愚かさのために死んでいったのであって、あの方の自殺はわたしにはまったく責任はありません (I, 185-88)。

マルセラの意図は、アンブロシオが吹聴していた彼女自身に関する噂を否定し、自己弁護することなのである。

たしかに、グリソストモが書いた「絶望の歌」は、アンブロシオが主張するようなグリソストモとマルセラの〈愛と死の記録〉という事実ではなく、〈ぼく〉と〈きみ〉との〈愛と死の物語〉という虚構だったのだから、マルセラの言い分は正しい、ということになる。

しかし、マルセラの弁明によって、彼女が〈きみ〉のように残酷ではないということが証明されるわけではない。次に述べるが、逆に、彼女の意図に反して、彼女の冷酷さが読者に伝わってくるのである。

それこそが、作者の意図だからである。

6. 作者の意図：同時代の信仰に対する批判

マルセラは、弁明のなかで、自分の「純潔」(I, 186)や「良心」(I,187)や「分別」(I, 187)を主張するが、その申し立てが正しいければ正しいほど、誰からの《愛》も受け入れず《結婚》を認めないという点で、むしろ、彼女は、残酷な〈きみ〉よりも、より冷酷であるということ、作者は訴えようとしているのではないのだろうか。そして、それは彼女の《神》への信仰が純粹過ぎることによって、という点を暗黙裡に示すことによって、セルバンテスは、同時代におけるキリスト教の信仰態度に対する批判を仕掛けている、と考えられるのである。

作者は、読者に、「絶望の歌」の〈きみ〉とマルセラを比較するよう仕向け

ているのだ。マルセラは「絶望の歌」を聞いていなかったのに、「絶望の歌」の中に現れる言葉を用いて弁明をおこなうからである。

「信頼できる女性という良い評判」(I, 184) がたつほどのマルセラが虚偽を言うとは思えない。そこで、マルセラの言葉を彼女本来の姿を映していると考へ、それを、「絶望の歌」の中での〈きみ〉を形容する表現と比較することで、セルバンテスは、マルセラの方こそ《神》だけを一途に憧憬するために〈残酷な女〉である〈きみ〉よりも冷たい〈残酷な女〉である、と提示している、という点を確認したい。

そのため、IIでは、「軽蔑」「嫉妬」「希望」「絶望」「分別」「残酷」など、「絶望の歌」とマルセラの弁明に共通して用いられている言葉を中心にして、〈きみ〉とマルセラを比較・対照しようと思う。

II. 「絶望の歌」とマルセラの弁明

1. 詩のプロローグ（一聯目・二聯目・三聯目）

「残酷な (cruel) きみが望むからには…」(I, 180)で始まる「絶望の歌」は、9聯133行の抽象的で難解な詩だ。一聯目、二聯目、三聯目は、詩全体から見るとイントロダクションの部分である。宗教批判という問題点から考えると、「絶望の歌」は、四聯目からが中心となる。三聯目までを概観したあとで、四聯目以降を順に見ていきたい。

一聯目と二聯目で、この詩の主人公である〈ぼく〉は、普段とは異なる、「苦しい胸の奥」(I, 181)から出てくる声音で、「残酷な」(cruel)〈きみ〉が望むとおり、〈きみ〉の愛の手柄と〈ぼく〉のつらい(cruel)苦悩を人々に伝えようと宣言する。三聯目においては、「きみの類なき厳しさ(rigor)」(I, 182)を訴える「ぼくが咆哮するぼくの不幸せのこだま」(I, 182)は、〈ぼく〉の「不運の特権により広く世間に知れ渡るだろう」(I, 182)と嘆く。ここで〈ぼく〉が歌う歌が「絶望の歌」だ（「絶望の歌」は「絶望の歌」のなかで言及されている）。

最後の八聯目・九聯目が詩のエピローグであるため、次の四聯目から七聯目までが、「絶望の歌」の実質的な聞かせどころとなる。

2. 愛を無視する女マルセラ（四聯目）

四聯目では、〈きみ〉から与えられた四種類の苦痛——〈きみ〉からの軽蔑、〈きみ〉に対する疑い、〈きみ〉への嫉妬、〈きみ〉との長い別れ——に耐え、奇跡的に生きている〈ぼく〉のつらい状況が綴られる。

ぼくは生きている、嫉妬に狂い(celoso)

軽蔑されて(desdeñado) 会うこと叶わず

疑いに死ぬほど苦しみながら(I, 182)。

〈ぼく〉は〈きみ〉が他の男を愛していることに嫉妬し、彼女から軽蔑されていることに苦しんでいるのである。

マルセラはこのような冷たい仕打ちをグリソストモに行っているのだろうか。

作者は、読者にマルセラと〈きみ〉を比較してもらうために、マルセラに、詩の中の「軽蔑」と「嫉妬」という同じ言葉を用いさせて、次のように弁明させる。「わたしのせいで死ぬ人がいても、その人は、わたしに軽蔑された(desdichado) からでもなければ、嫉妬のために(celoso)死んだのでもありません」(I, 187)。

マルセラは〈きみ〉とはまったく対照的なのである。マルセラは、自分は、グリソストモを「軽蔑」した覚えもなければ、「嫉妬」を引き起こしたこともないと言っているのだ。彼女はその理由を明かす。まず、軽蔑に関しては、「きちんとお断りすることと軽蔑(desdenes)とはまったく異なることです」(I, 187)と言って、軽蔑したのではなく、理性的に断ったと弁明する。また、嫉妬については、「誰ひとり愛していないから」(I, 187)嫉妬を引き起こすことはない、と言明する。だから、「こちらの方をだまして、あちらの方を慕うことなど、けっしてありえません」(I, 188)と断言するのだ。彼女はグリソストモに対してだけ愛を拒絶しているのではない、と弁明しているのだ。

〈きみ〉が、ほかの男からの《愛》を受け入れ、〈ぼく〉を拒絶するのに対し、マルセラは、誰からの《結婚》の申し込みも最初からきちんと断り、《愛》をまったく受けつけないのである。これは、前稿で考察したが、彼女が《神》から与えられた〈純潔〉という〈美〉を守ろうとするからなのだ²⁵。

マルセラとは、《神》に謙虚であろうとするために、〈きみ〉とは異なり、

男たちからの《愛》をすべて無視し《結婚》を拒絶する女性なのである。

3. 〈希望の歌〉と対称・対照関係にある「絶望の歌」(四聯目)

このあと、〈ぼく〉の精神状態が吐露される。希望の持てない状態の〈ぼく〉は、希望を捨てることを決意する。希望を否定しているこの箇所からは、「絶望の歌」が、11章におけるアントニオの〈希望の歌〉に対する虚構だということが明白になる、と考えられる。この点を再度確認したい。

この目は希望 (esperanza) の影さえ認めず、
絶望して希望を求めることもなく、
むしろ悲嘆を極めようとして、
未来永劫に希望の放棄を誓う(I, 182)。

〈ぼく〉は、たんに希望を失い悲しんでいるだけだろうか。それだけではない、と筆者は考える。11章のアントニオが、〈希望の歌〉の中で、なんとかして「希望(esperanza)の衣の裾の裾」(I, 159)を見出そうとしていたように²⁸、〈ぼく〉は努力して絶望しようとしている、と考えられるのである。「悲嘆を極めよう」とする〈ぼく〉に思いを託すことで、グリソストモも絶望の極みに向かおうとしているのではないのだろうか。

「絶望の歌」は〈希望の歌〉に対して配置されているのだ。

〈希望の歌〉と「絶望の歌」は、〈受け入れがたい現実〉を受け入れる虚構であるという点で共通する一方、希望と絶望という点で対照関係にあるのは明らかなのである。

4. 希望を与えない女マルセラ (四聯目・五聯目・六聯目)

作者は、四聯目での〈ぼく〉の言う「希望」「絶望」に関しても、読者に、マルセラと〈きみ〉を対照するよう仕向けている。マルセラも、「希望」「絶望」という言葉を用いて弁明するからだ。

マルセラは、「わたしを恋慕した殿方の誰にも希望を抱かせたことなどありません」(I, 187)、「わたしが希望を与えるような約束をしておきながらそれを破ったなら絶望すればよいでしょう」(I, 187)と言う。ここでも、マルセラと

〈きみ〉には大きな隔たりが存在するのである。〈きみ〉とは、「希望」を与えながらも「絶望」へと陥れる女であるのに対して、マルセラは、最初から「希望」を抱かせることがないのだ。それは、2で示したように、マルセラが《神》にだけ一途な思いを抱いているからなのである。

次の五聯目では、「目の前に抑えがたい嫉妬があり」「軽蔑があらわになり」(I, 182)と、四聯目で訴えた苦痛への嘆きをもう一度強く繰り返し、〈きみ〉への「不信感」は極限に達した、と〈ぼく〉は言う。そして、死を決意する。

おお 愛の王国の残忍な暴君である、

嫉妬よ ぼくの手を刀を置け。

軽蔑よ ぼくに太い縄をくれ。

だが この苦しみにとどめをさす、

残酷な勝利はやはりきみの思い出 (I, 183)。

「嫉妬」や「軽蔑」よりも、〈きみ〉の「残酷」な思い出が最後のとどめだと〈ぼく〉は言う。ここでの〈きみ〉の思い出とは、やさしい〈きみ〉の面影だと考えられる。〈ぼく〉が思い出す〈きみ〉との思い出が、不信感によって、今では〈ぼく〉の心を最大限に苦しめるものとなったのだ。

しかし、グリソストモには、マルセラとのなつかしい思い出など存在しなかった。彼にとって、マルセラとの思い出といたら、大岩の下で出会って拒絶されたことしかないからだ。〈ぼく〉が「愛の王国」で心楽しい思い出を共有する者は、マルセラではなく、〈きみ〉なのである。ここからも〈きみ〉とマルセラは一致しないことは明白である。

そして六聯目においては、「ついにぼくは逝く、けっして希望など、生にも死にもかけることなく」(I, 183)と言って、〈ぼく〉は死を宣言する。四聯目で「希望の放棄」を誓った〈ぼく〉は、ここでも、その決意を固めるのである。

「愛の暴政に屈するほどに、(何も考えなくてすむので—筆者注) たましいは自由になる」「かたきの女に忘れられるはぼくの罪」「愛のなせる悪によってその王国は平和を保つ」(I, 183)と皮肉をきかせ、〈残酷な女〉をあてこすりながら、〈ぼく〉は、急角度で死へと傾いていく。そして、「これらの考え」(I, 183)と「丈夫な縄」(I, 183)と「あの女の軽蔑」(I, 183)のおかげで、「未来の栄

誉の望みもなしに、風にこころとからだをさしだそう」(I, 183)と歌う。死が暗示されているのだ。

3で考察したが、〈ぼく〉は、アントニオが「希望」を積極的に求めたように、やはり、必死に「絶望」し死へと傾斜していこうとしているのである。この箇所でも、グリソトモは、〈ぼく〉と〈きみ〉との〈愛と死の物語〉を創造しているのである。

5. 分別ある女マルセラ（七聯目）

次の七聯目でも、婉曲や皮肉で、〈ぼく〉の死の責任を〈きみ〉に負わせている。八聯目と九聯目がエピローグの役割を果たしていると考えられるため、この七聯目は、〈きみ〉の残酷さを激しく責める、歌のサビの部分と言えるだろう。まず、ここでは、〈きみ〉は無分別な行為をしてきたと非難されている。

おぞましく疲れたこの命に、
分別をするしかない、数々の

無分別(sinrazones)で分別(razón)を示したきみよ (I, 183)。

死という「分別」ある行為を〈ぼく〉に決意させたのは、ほかならぬ〈きみ〉が〈ぼく〉に対して「分別」をもっておこなった「無分別」のおかげだ、と皮肉を利かせて、〈きみ〉が〈ぼく〉に対して希望を奪い軽蔑し嫉妬させる、というような「無分別」な行為をしたことが、〈ぼく〉の自殺の原因だ、と言うのだ。

しかし、マルセラは、自分は求愛する男たちに対してそのような「無分別」なことはしていない、と主張していた。それにくわえ、どれほど彼女なりの「分別」ある行動を取ったか、説明する。

男たちには「言葉でもって覚ますようにつとめました」(I, 187)と言い、グリソトモから愛を打ち明けられたとき、「わたしの思いは、いつまでも孤独の中で過ごすことです」(I, 187)と伝えて理性的に断ったことを明らかにする。そして、「グリソトモの性急さと向こう見ずな欲望が彼の命を奪ったのに、どうして、わたしの純潔なふるまいと分別(recato)が非難されなければならないのですか」(I, 187)と、自分には「分別」があることをマルセラは主張する

のである。

これは、〈ぼく〉が言う、無分別な〈きみ〉の行動とは正反対なものだ。マルセラは、常に分別ある行動を取って、無分別なことなど一切していないことに自信を持っているのである。

6. 残酷ではない女マルセラ（七聯目）

〈ぼく〉は、さらに、

きみは、この胸の深い傷が
喜んでぼくがきみの厳しさ(rigor)に殉ずる
たしかな証だと認めるだろう

．．．

一刻も早いぼくの死がきみの榮譽を
さらに輝かせるものだから(I, 183)。

と、畳み掛けるように〈きみ〉の「残酷」さを、あてこする。

〈ぼく〉は、一聯目でも、〈きみ〉を「残酷な」(cruel)女と呼びかけ(I, 180)、〈きみ〉の残酷さを、「きみの過酷な厳しさ」(el áspero rigor tuyo)と形容した(I, 180)。二聯目では、〈ぼく〉が〈きみ〉から受けた苦しみを、「残酷な苦悩」(la pena cruel)と表現し(I, 181)、五聯目でも、〈きみ〉との思い出は「残酷な」(cruel)ものだったと言った(I, 183)。このように、〈ぼく〉は、詩全体をとおして、〈きみ〉の「残酷さ」を訴えている。〈きみ〉とは〈残酷な女〉なのである。

作者は、「残酷」という言葉を軸に、マルセラと〈きみ〉を対照している。マルセラは、グリソストモの死は自分の「残酷さ」によるものではないと、「残酷」という同じ言葉を用いて、次のように弁明するからだ。

「グリソストモを殺したのは、わたしの残酷さ(crueldad)ではなく、あの方の執拗さであったと言えるでしょう」(I, 187)。そして、「グリソストモは、断られたのに諦めようともせず、嫌われたわけでもないのに絶望してしまった(desesperó)のです」(I, 187)と、グリソストモは、彼自身の「執拗さ」に殺された、とマルセラは説明し、最後には、「わたしを残酷な女(cruel)と呼ぶ者はわ

たしを追いかけたりしないことです」(I, 187)とまで言うのである。

〈きみ〉が〈残酷な女〉であるのに対して、マルセラは残酷ではないのだ。〈きみ〉を形容するときに重要な性質である「残酷」という点に関しても、〈きみ〉とマルセラは乖離しているのである。

7. 詩のエピローグ（八聯目・九聯目）

最後の2聯である八聯目と九聯目では、〈きみ〉を怨んでいると言いながら死んでいく〈ぼく〉の姿が描かれている。

八聯目では、タンタロス(Tántalo)やシーシュポス(Sísifo)など「奈落の底」で苦しみをかこつ神話上の存在者や怪物に、「死衣さえ許されない」(I, 184)〈ぼく〉への挽歌を歌ってくれるよう〈ぼく〉は頼む(I, 183-84)。この聯では、〈ぼく〉の悲惨な状況が比喻を用いて強調されているのである。

そして、最終聯の九聯目で次のように絶望することで、「絶望の歌」は終了する。

「絶望の歌」よ、ぼくという悲しい道連れを
失うときにも嘆くことはない、
おまえを生んだ原因は
ぼくの不幸のおかげで幸を多くするのだから
墓場にいっても悲しむことはないのだ(I, 184)。

「おまえを生んだ原因」とは〈ぼく〉が苦しんだ原因ということである。つまり〈きみ〉のことだ。〈きみ〉は〈ぼく〉が死ぬことで幸せになると、〈ぼく〉は、〈きみ〉をあてこすり、〈きみ〉に対して怨みを抱きながら死ぬのである。

8. 〈冷酷な女〉マルセラ

共通な言葉や表現を中心にしてマルセラと〈きみ〉を比較すると、ふたりの言動はまったく相反するのである。マルセラは、グリソストモに対して残酷な行為をした覚えはない、と弁明した。一方、「絶望の歌」では〈きみ〉の〈ぼく〉に対する残酷さばかりが書かれている。

マルセラとは、《神》との合一を望むため、〈残酷な女〉である〈きみ〉とは対照的な、「純潔を守るのに一分のすきもない」(I, 166)乙女なのである。

しかし、希望も、共有する思い出も与えず、グリソストモの死は自分とは一切関係がない、と断言するマルセラを、残酷ではない、と言えるだろうか。所もあろうに、グリソストモの埋葬の場で、グリソストモにも誰にも最初から希望を抱かせることなどなかった、彼の死は彼自身の執拗さのせいだと言い放ち、《結婚》を願う男たちを完全に無視する、という点で、マルセラは、《愛》を弄ぶ〈残酷な女〉よりも残酷、むしろ冷酷と形容できるのではないだろうか。

セルバンテスは、マルセラのことを〈残酷な女〉だと訴えている、と考えられるのである。しかも、このことを、マルセラの弁明によって、自然に知れるよう、彼は意図しているのだ。弁明が正しければ正しいほど、〈残酷な女〉以上に冷酷であるということが際立ってくるからである。

そして、マルセラが冷酷なのは、正統思想を護持する〈司祭である叔父〉に養育されたため《結婚》を認めず《神》と直接結ばれることだけを強く念じているからだ、と暗に表すことで、セルバンテスは、同時代における狂信的な信仰に対して異議を申し立てているのではないのだろうか。

Ⅲ. 宗教批判という爆弾——結論に代えて

グリソストモは、〈ぼく〉と〈きみ〉との虚構である「絶望の歌」という〈愛と死の物語〉を書いて、希望を捨て絶望へ向かおうと意図した。この虚構を〈愛と死の記録〉と誤読したアンブロシオの意図は、彼女への批判を村人たちに喧伝することだった。マルセラは、自己弁護しようと意図し、アンブロシオや村人たちが噂するような残酷なことをグリソストモにした覚えはない、と訴えた。

しかし、マルセラが弁明しても、彼女が〈きみ〉のように残酷でないことが明らかになるどころか、逆に、マルセラの意図に反して、マルセラの冷酷さが際立ってくるのだ。

セルバンテスは、三者三様の意図を巧みに利用し、最後にマルセラに弁明さ

せることによって、彼女が《神》中心主義者であるがゆえに、〈残酷な女〉である〈きみ〉よりも冷たい〈冷酷な女〉である、ということが自ずと浮かび上がってくるよう、テキストの構造を組み立てていたのである。

要するに、セルバンテスは、前景には賢明な女性マルセラを描き、その背後に、中心問題である宗教批判が垣間見えるよう意図していたのだ。

そのため、テキスト上では、マルセラの弁明の言葉を聞いた者たちが、大いに彼女を賞賛する。弁明を聞いた者たちは、彼女が去ったあと、「彼女の美しさと同様その思慮深い言葉遣いにひたすら驚く」(I, 188)。

さらには、キホーテも、彼女が「明快で十分な論理」(I, 188)で弁明を展開したこと²⁷に感激し、「この世でこれほどまでに純潔に生きようと意図しているのは、あの方をおいてほかにはいないということを示されたのだから、……すべての正しい人間によって尊重され、あがめられてしかるべきじゃ」(I, 188)と彼女を高く評価する。こうして、賢明なマルセラ像は強化される。

しかし、キホーテの言葉は、作者のアイロニーなのだ。

騎士にとって女性崇拜は必要な務めのひとつであるから²⁸、自分を騎士と任じるキホーテが純粋に生きようとするマルセラを褒め上げるのは、当然のことだ。しかし、キホーテは、騎士道物語を濫読したために現実世界と虚構世界を区別できず、自分のことを本物の騎士だと思い込んでいる狂人である²⁹。狂気の騎士がマルセラをたたえるのだから、それは真実から遠く離れている、ということになるのだ。

作者は、キホーテたちに、マルセラの真摯な信仰態度を賞賛させながら、実は、読者に、彼女の裏に潜む冷酷さを伝えようとしているのである。

セルバンテスは、異端審問が機能し《神》一辺倒になり寛容精神をなくしていた、彼が生きていた時代における宗教のあり方に疑問を抱いていた、と考えられる。しかし、まさにそういった時代であるがゆえに、あからさまに批判することはできなかった。そのため、《神》中心主義者であるマルセラと《結婚》できないために自殺するグリソストモを描くことで、《人間》中心思想への賛意を表わした。さらには、マルセラの弁明をとおして、強圧的であった17世紀当時のキリスト教信仰に対して、宗教批判という爆弾を仕掛けたのである。

IV. 別稿の予告

アンブロシオは、グリソストモとマルセラの〈愛と死の記録〉を創造していたが、彼のその役割の極めつけは、グリソストモの墓石に印す詩を考えたことである。「アンブロシオの言うところによれば、・・・墓石には次のような碑文を刻むよう注文するつもり」(I, 188)とある。これは、「グリソストモの葬式のエピソード」中、アントニオの〈希望の歌〉、グリソストモの「絶望の歌」につづく、第三の詩と言えらるだろう。8行の短いものだが、ここでアンブロシオは、「情けを知らぬつれなく美しい女の残酷(rigor)な手にかかり命を落とした羊飼ひ」(I, 189)はこの墓に眠る、と綴ったあと、最後の二行で、

愛という名の暴政は con quien su imperio dilata
それゆえ版図を拡げたり。 la tiranía de amor (I, 189).

と書き入れるのだ。アンブロシオは、グリソストモの「絶望の歌」をプレテクトにして、この詩を創作したと考えられる。「絶望の歌」の中の「愛の王国の残忍な暴君」(en el reino de amor fieros tiranos)(I, 183)から本歌取りをしているのは明らかだからだ。この〈愛の碑文〉によって、グリソストモは奔放な《愛》の力によって死んだと受容され、「絶望の歌」は、グリソストモとマルセラの〈愛と死の記録〉として完成する。

本稿でも考察したが、これも、カトリック信仰による宗教的統一が達成された時代、当局の目を逃れるための作者の技法だと考えられる。本エピソードの本質的な問題である《神》の問題を、作者は、《愛》の物語の陰に置いたのだ。

このように、セルバンテスは、同時代の信仰に対する疑念を表立たないかたちで表しているのである。このほかにも、マルセラは男たちからの愛を受けつけないのだから、本来、男たちの仇敵であるはずなのに、アンブロシオは、彼女を「人類の仇敵」(enemiga mortal del linaje humano)(I, 178)と指弾している。これは、《神》に熱狂するマルセラのような人間に対する、作者の秘めた批判の言葉ではないか、と筆者は考える。

「絶望の歌」においてばかりでなく、本エピソード全体をとおして、セルバンテスは、17世紀におけるキリスト教正統思想の非人間性を表そうとしている

のではないのだろうか。

そこで、稿をあらため、どのようにして《神》の問題が《愛》によって隠されているのか、という点について、「グリソストモの葬式のエピソード」を11章から14章まで通観することで、さらに深く考察したいと思う。

注

¹ 「絶望の歌」に関しては、これまで、ロドリゲス・マリン (Francisco Rodríguez Marín) をはじめ多くの研究者たちが、グリソストモの死は自殺によるものか否か、という点ばかりに注目し、考察の対象としてきた。「絶望の歌」の中では、「ぼくの手を刀を置け」(I, 183)や「丈夫な縄を手に・・・風に心とからだをさしだそう」(I, 183)といった自殺を想起させる表現が見られる一方、テキストでは、「(グリソストモは) 愛のために死んだ」(I, 161)とだけ噂されているという点や、さらには、グリソストモが墓地ではなく大岩の下に埋葬して欲しいと望んでいる遺言を村の司祭は反対しているという叙述(I, 161-62)から自殺者を墓地に葬ることを認めていなかった当時のキリスト教会の考えを念頭に置くと自殺ではないとも考えられる(本田、p.234)など、グリソストモの死因についての説明が曖昧なのだ。詩とテキストの間の矛盾に関する、代表的な研究者の意見については、鈴木、2011を参照願いたい。

² これは書名ではなく作品名であるが、原文はイタリック体で表記されている。

³ アントニオの歌には、希望 (esperanza) という言葉が出ているだけでなく、実際、この歌を歌うことによって、アントニオは希望を見出していった。そのため、筆者は、この歌を〈希望の歌〉と呼ぶことにする。詳しい考察は、鈴木、2010を参照願いたい。

⁴ 筆者は、11章のアントニオの歌う〈希望の歌〉についての考察によって、〈希望の歌〉は、1. 《物語》の働き(《物語》については、注6を参照のこと)と、2. 《愛か神か》という、二つの問題を内包している、という点を指摘した。それは、次の考察の結果に因った。アントニオは、愛する女性オラージャ(Olalla)が自分のことを好きになってくれないという(受け入れがたい現実)を、本当は彼女も自分のことを愛している、という内容の〈希望の歌〉=《物

語》にして、歌うことで希望を見出していた。このことによって、①《物語》を創作することによって、〈受け入れがたい現実〉を受け入れることができる、ということと、②〈希望の歌〉がアントニオに希望を与えることができるのは、この歌をアントニオと共作した、アントニオの〈司祭である叔父〉が、《神》への信仰の他に、人との《愛》も大切に考えるという点で、17世紀においては、いわば異端的な思想の持ち主だったことに囚る、という結論を導いた。①、②二つの結論は、上述の1、2に対応していた。詳しい考察は、鈴木、2010でおこなった。参照願いたい。

⁵ 14章の「絶望の歌」とは、アントニオが人との《愛》を大切に考えるという点で寛容的思想を持った〈司祭である叔父〉と共作した〈希望の歌〉に対し、アントニオの叔父の思想とは対照的な思想である正統思想を護持した〈司祭である叔父〉に育てられ、《神》だけに一途に憧れていたマルセラから、《結婚》を拒絶されたグリソストモが希望を放棄するために書いた、《物語》だと、筆者は考えた。詳しい考察は、鈴木、2010でおこなった。参照願いたい。

⁶ 《物語》については、前々稿と前稿において小川の説く「ひじょうに受け入れがたい困難な現実」にぶつかったとき、人間はほとんど無意識のうちに自分の心の形に合うようにその現実をいろいろ変形させ、どうにかしてその現実を受け入れようとする」(小川、p.22)という《物語》の働きについての解釈を参考とし、《物語》を〈受け入れがたい現実〉を受け入れるための自分にとっての都合のよい虚構と定義してきた。さらに詳しい説明は、鈴木、2010を参照願いたい。

⁷ 17世紀のスペインにおいては、カトリック信仰による宗教的統一を目的に、宗教的弾圧が厳しくなっていた。関他、pp.256-59.

⁸ セルバンテスは、二十歳のころに通っていた私塾の師ロペス・デ・オヨス(Juan López de Hoyos)からエラスムス思想を学んだ、と言われる。カナヴァジオ、pp.55-57。スペインの社会においては、1535年頃には、エラスムス主義は排除されていた。その後、宗教の多元性が封じられカトリックの宗教的統一が勝利を収めていた。ヴィラール、pp.35-36。エラスムス思想を、精神に強く刻み込んだと考えられるセルバンテスにとって、カトリック正統思想の信仰を

強要する社会や時代は耐えがたいものだったのではないのだろうか。セルバンテスにおけるエラスムス思想の影響や、17世紀スペインの宗教思想について、筆者は、前稿で詳しい考察を加えている。鈴木、2011を参照願いたい。

⁹ エラスムスは《人間》の命をつないでいく営みである《結婚》を重視していたが、それは、《神》を中心に置く思想に反対し、《人間》を第一と考えていたからである。詳しい考察は、前稿でおこなった。鈴木、2011を参照願いたい。

¹⁰ 正統思想を護持する〈司祭である叔父〉に育てられたマルセラは、〈自然〉という〈修道院〉で、〈純潔〉という〈美〉を守るために、日常的束縛から逃れ、《神》と結ばれることを強く希求し、《愛》を拒絶した。この点についての詳しい考察は、鈴木、2011でおこなった。参照願いたい。

¹¹ セルバンテスが本エピソードを書いた理由のひとつは、彼がエラスムスの著作『対話集』(*Colloquia*, 1518-33)中の、《結婚》の大切さを説く一編「恋する青年と乙女」(“Proci et puellae”)から強い示唆を受けていたことだと筆者は考える。セルバンテスは《結婚》を重視していたのだ。《神》中心思想に対抗する、エラスムスの《人間》中心思想に共鳴していたからである。そのため、《神》中心主義者であるマルセラと《結婚》できなかったグリソストモを死なせるのだ。本エピソードが「恋する青年と乙女」の影響下にあるという点、セルバンテスがエラスムスの説く《人間》中心思想の持ち主であったという点、そして、グリソストモが自殺した直接の原因が、マルセラがグリソストモからの《結婚》を拒絶したことにある、という点については、前稿の鈴木、2011で考察した。参照願いたい。

¹² 注8、及び、注11を参照のこと。

¹³ 『ドン・キホーテ』が出版された17世紀初頭の時代状況は次のとおりである。「17世紀にはいる頃には異端審問は最大限の権力をもっていた。・・・疑惑と恐怖に満ち満ちた雰囲気、あらゆる知的生活に害を与えた。・・・わずかにでも教理に触れるような問題については、意見を自由に述べることは憚られた」。ドミンゲス・オルティス、pp.142-45。セルバンテスは、正統思想に対してあからさまに批判できなくなった、と筆者は考える。

¹⁴ テクストには、アントニオの叔父は〈希望の歌〉を代作したとしか記されて

いないが、この歌の中には、アントニオの恋の思いと叔父の宗教的思想が溶解している。この点から、〈希望の歌〉はアントニオと叔父との共作と言える。以上の考察は、鈴木、2010でおこなった。参照願いたい。

¹⁵ 『ドン・キホーテ』のテキストはLuis Andrés Murillo 編を底本とした。テキストの引用のあとに付した括弧内の数字は、すべて上記のテキストからの引用ページをあらわす。『ドン・キホーテ』のテキストは正編と続編の2冊あるので、正編からの引用の場合は (I, ページ数) と記した。なお、引用文の翻訳は、永田寛定・高橋正武共訳 (岩波書店)、会田由訳 (筑摩書房)、牛島信明訳 (岩波書店) の三つの翻訳版を参考にして筆者がおこなった。

¹⁶ 前々稿 (鈴木、2010) から筆者が始めた本研究とは、本エピソードを、セルバンテスは、1. 《物語》の働きと2. 《愛か神か》という二つの問題を中心にして、11章と14章を対称的でありながら対照的である対立構造で構成している、と捉え、これら二つの問題について考察している研究を指す。鈴木、2010、及び、鈴木、2011を参照願いたい。

¹⁷ 注5を参照のこと。

¹⁸ スペインにおけるセルバンテス研究の泰斗であるロサレス(Luis Rosales)は、グリソストモの絶望は「感傷的な見せかけ」であり、「感性の鋭い者が愛に身を焦がしたら愛のために死ななければならない」と考え、「実際のところ、グリソストモには死ぬ理由はまったくない」とし、結局のところ、彼のしたことは、「すべて文学的な虚構であり、遊びごと」と見なしている。Rosales, pp. 1044-1045. ロサレスの説は、グリソストモは、ただなぐさみとして、自殺する男の虚構である「絶望の歌」を書いただけであり、この詩は彼の死因とは直接的な関係はない、ということである。たしかに、グリソストモは、現実のマルセラとは異なる〈残酷な女〉を描いた、という点では、「絶望の歌」は、文学的と断じることができるかもしれない。しかし、グリソストモは、文学趣味からではなく、このままの状態でも救われぬという切実な思いから、希望を捨て絶望に至る「絶望の歌」を書いたのではないのだろうか。

¹⁹ 注9を参照のこと。

²⁰ 注10を参照のこと。

²¹ 「14章に出てくる詩を見ると、彼の死が自殺によるものであることがわかる。・・・セルバンテスは、自らの意志でこの世に別れを告げようとする人間の苦悩や、究極の孤独の深い部分に思いをはせようとする、強い内省的欲求を詩文の中で満足させたのである」と、カストロ(Américo Castro)は、グリソストモの死は、悩みぬいた果ての自殺であった、と断定している。カストロ、p.340.

²² セルバンテスは秘かに、埋葬場所に、忘却ではなく、生まれ変わってもマルセラと結ばれたいというグリソストモの強い願望を反映させようとしているのではないのだろうか。『イメージ・シンボル事典』によれば、グリソストモが埋葬を指定した「コルク樫の泉の大岩の下」の「樫」は、秋に燃え立つように赤くなることから〈命の火〉〈再生〉を、「泉」は湧き出るものということから〈誕生〉〈再生〉を、そして「岩」も考えようによっては動植物の〈命の源〉を意味するからだ。この場所は、〈再生〉や〈命〉を象徴しているのだ。この埋葬場所は、グリソストモのマルセラへの思いは死んでも一途だということを示している、と考えられるのである。

²³ ロドリゲス・マリンは、この詩は、セルバンテスが本エピソード以前に書いたものであり、もしかしたら、セルバンテスが出版を望みながら著すことになかった『ラ・ガラテア続編』のために書いた詩のうちの一つではなかったか、と唱えている。Cervantes, 1947-49, p.386(nota). この説が提示されて以来、「絶望の歌」は『ドン・キホーテ』以前に成立していたという事実が、詩とテクストが矛盾している、という問題に対する一つの解答となっている。この説とこの詩の写本については、前稿の鈴木、2011を参照願いたい。

²⁴ オリジナルの「絶望の歌」では1. ofreceré a los vientos cuerpo y alma / en lauro o palma de futuro bienes. (下線は筆者。以下同様) (未来の榮譽の望みを抱いて、風にこころとからだをさしだそう) 2. con mi desdicha aumenta su ventura, / no es desventura para ser tan triste. (ぼくの不幸のおかげで幸を多くするのだから、それほど悲しむほどの不幸でもない) と書かれている。これに対して、『ドン・キホーテ』の「絶望の歌」では、1. sin lauro o palma de futuros bienes. (未来の榮譽の望みもなしに) 2. aun en la sepultura no estás

triste. (墓場にいても悲しむことはないのだ)となっている。アバジェ・アルセは、『ドン・キホーテ』の「絶望の歌」においては自殺が強く暗示されている、と考えている。 AValle-Arce, pp.96-98.

²⁵ 注10を参照のこと。

²⁶ アントニオは、愛する女性オラージャの自分に対する冷淡さの裏に、本当は自分のことを愛してくれているのではないか、というかすかな希望を見出そうとする。詳しい考察については、鈴木、2010を参照願いたい。

²⁷ マルセラは、正統思想を護持する〈司祭である叔父〉と長いあいだふたりだけで生活したため、自ずと聖書世界を学び、さらに、自然の中での節制した生活をとおして《神》について思索を重ねてきた、と筆者は考えた。だからこそ、冷静に論理的な判断ができた、と考えられる。この点については、すでに、鈴木、2011で考察した。参照願いたい。

²⁸ 「女性奉仕の義務は、騎士の徳目訓の中で重要な位置を占めていた」。ブムケ、p.473.

²⁹ この点については、鈴木、2008で詳しく考察した。参照願いたい。

引用文献

第一次資料

Cervantes Saavedra, Miguel de. edición de Francisco Rodríguez Marín. *El ingenioso hidalgo don Quijote de la Mancha*, Madrid: Atlas, 1947-49.

—————. edición de Luis Andrés Murillo. *El ingenioso hidalgo don Quijote de la Mancha I*, Madrid: Castalia, 1987.

第二次資料

Avalle-Arce, Juan Bautista. *Nuevos deslindes cervantinos*, Barcelona: Ariel, 1975.

ブムケ、ヨアヒム。『中世の騎士文化』平尾浩三・和泉雅人・相澤隆・斉藤太郎・三瓶慎一・一條麻美子訳、東京：白水社、1995。

ドミンゲス・オルティス、アントニオ。『スペイン 三千年の歴史』立石博高訳 京都：昭和堂、2006。

エラスムス。「対話集」二宮敬訳、渡辺一夫編『エラスムス トマス・モア

- 世界の名著 17』、pp.191-348、東京：中央公論社、1969.
- フリース、アト・ド. 『イメージ・シンボル事典』 山下主一郎主幹、東京：大修館、1984.
- 本田誠二. 『セルバンテスの芸術』 東京：水声社、2005.
- カナヴァジオ、ジャン. 『セルバンテス』 円子千代訳、東京：法政大学出版局、2000.
- カストロ、アメリコ. 『セルバンテスへ向けて 『わがシッドの歌』 から 『ドン・キホーテ』 へ』 本田誠二訳、東京：水声社、2008.
- 小川洋子. 『物語の役割』、東京：筑摩書房、2007.
- Rosales, Luis. *Cervantes y la libertad*, Madrid : Ediciones Cultura Hispánica Instituto de Cooperación Iberoamericana, 1985.
- 関哲行・立石博高・中塚次郎編. 『世界歴史体系 スペイン史 1—古代～近世』、東京：山川出版社、2008.
- ヴィラール、ピエール. 『スペイン史』 藤田一成訳、東京：白水社、1992.
- 鈴木正士. 『『ドン・キホーテ』 における創造世界—非騎士道世界から騎士道物語世界への変換行為をとおして』、大津：行路社、2008.
- . 「アントニオの歌う〈希望の歌〉—『ドン・キホーテ正編』11章についての新たな解釈の試み—」、『琉球大学欧米文化論集』第54号、pp.23-50、2010.
- . 「結婚と純潔—『ドン・キホーテ正編』14章に見るエラスムスの人間中心思想の影響—」、『琉球大学欧米文化論集』第55号、pp.1-28、2011.

Crítica oculta a la religión: interpretación de *Canción desesperada* en el cap. XIV de *Primera parte de Don Quijote*

SUZUKI Masashi

En *Canción desesperada*, un poema en el cap. XIV, Miguel de Cervantes Saavedra (1547-1616) critica intencionadamente la devoción religiosa con tintes fanáticos de esa época, manejando con destreza las intenciones de los tres personajes, Grisóstomo, Ambrosio, su amigo íntimo y Marcela que ha rechazado la petición de matrimonio de Grisóstomo. Primero, Grisóstomo tiene la intención de abandonar la esperanza de que Marcela le ame escribiendo *Canción desesperada*, “ficción del amor y muerte” cuyos protagonistas son “yo y tú”, mujer cruel, para imitar a “yo”, quien quita la esperanza por el amor “tú”. Por otra parte, Ambrosio, al contrario de la intención de Grisóstomo, entiende mal *Canción desesperada*, y está seguro de que en ella se describe tanto a Grisóstomo como Marcela. La intención de Ambrosio es pregonar tanto *Canción desesperada* como “documento del amor y muerte” para todo el mundo. Después Marcela se justifica a sí misma con intención de aclarar que la muerte de Grisóstomo no es culpa suya. Y Cervantes les hace a los lectores comparecer entre las palabras de la justificación de Marcela y las de reproche hacia la figura del “tú” en *Canción desesperada*. Marcela, sin saberlo, usa en la justificación las palabras que vienen en el poema. Al final Cervantes intenta persuadir a los lectores de que Marcela es una mujer esencialmente más fría que la mujer cruel en la figura del “tú”. Cervantes compone la estructura de texto para que se extreeva que Marcela es más fría que la figura del “tú”, mujer cruel convencida que no había nada más importante que la devoción a Dios. Con esto, denuncia la situación del pensamiento religioso de su época en la que no se permite sino el catolicismo ortodoxo.